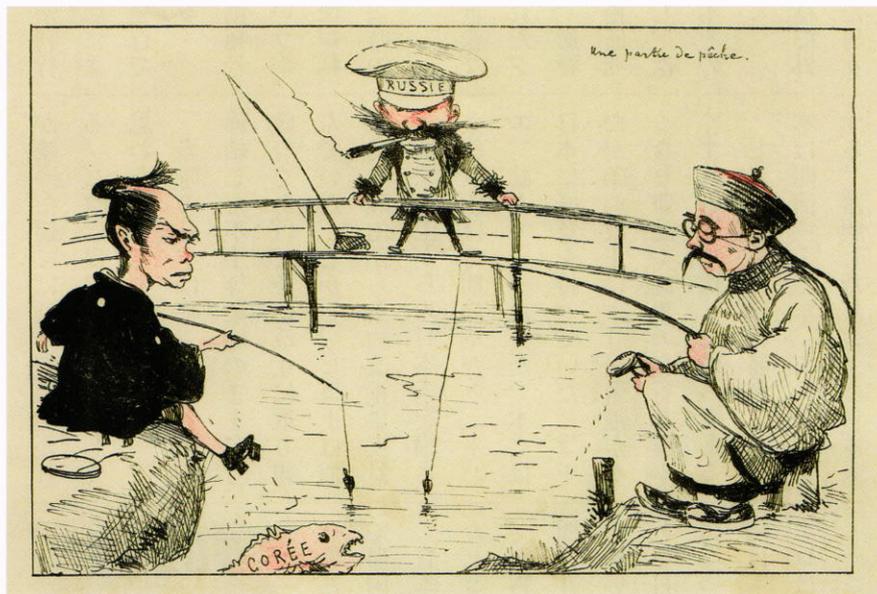


やまとの名品 天理図書館



TÔBAÉ (トバエ)

ジョルジュ・ビゴー画

横浜 明治20～

縦33.8cm 横25.3cm

フランス人画家ビゴーが刊行した明治二十年創刊の石版による時局風刺雑誌。月二回発行で約三年後、六九号で終わる。

前頁の絵は『トバエ』創刊号に載った「漁夫の利」という絵。日本の学校教科書によく使われ、日清露が朝鮮半島を窺う当時の東アジア情勢を風刺した。

ビゴーの青春時代は浮世絵など日本芸術がもてはやされたジャポニスムの時代だった。影響をうけたビゴーは日本美術研究のため明治十五年に来日し、次第に美術のみではなく日本そのものや日本人に興味を抱く。

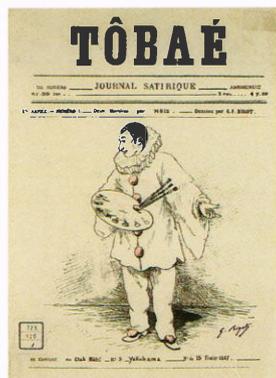
ビゴー描く日本人は滑稽で外見も芳しくない。正装した男女

が映った鏡には猿の顔が描かれる。ビゴーは日本人を好ましく思わなかったのだろうか。

当時の日本は幕末に諸外国と締結した不平等条約のまま、政府をあげて条約改正に取り組んでいた。しかし、ビゴーは個人的な理由から条約改正に反対し風采の上がらぬ日本人を描き、条約改正は時期尚早だと『トバエ』誌上でうったえた。本当は日本に好意を持っていたビゴーだが条約改正により居留地がなくなり雑誌や画集の発行基盤がくずれると危惧したからである。しかし日清戦争に勝利した日本は明治三十二年、条約を改正する。落胆したビゴーは日本人

女性との間に生まれた子を伴って帰国した。

日本滞在中、好ましくなかったビゴーの評価は、日本を離れてから次第に高まる。列強の間入りを果たし自信を持つにしたがい、風刺の題材になったことを日本人が客観視出来るようになったからである。カット図はトバエの表紙。描かれたピエロはビゴー本人である。



(天理図書館 早田一郎)